2015 年 2 月 25 日

中国・ベトナムの漢文文献の中の南シナ海方面の記述について　補遺９

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

１「補遺」（2014 年 7 月 14 日）で検討した中国の地図をめぐる問題について海野一隆氏のご研究に依拠しながら補足的説明を行う。

明・清期中国で作られた地図の主要な類型の一つに「マテオリッチが紹介した西洋の世界地理知識を断片的に採用した華夷図式世界図」がある[海野 2004：81-85]。先に検討した『大清万年一統地理全図』（京都大学附属図書館蔵）と『大清一統天下全図』（国際日本文化研究センター蔵）はこれに属する。17 世紀段階のものを海野氏の紹介する小さな写真上でみると、萬里石塘・萬里長沙は書かれていないように見えるが、正確に字を読むことができないので、今後の検討課題としたい。ただ少なくとも上の二地図と同じように書かれていないことは確かである。18 世紀には、黄宗羲作の図を改定して作られた黄千人図（『大清万年一統天下図』）の系統の図がしばしば刊行された[海野 2005a：374-377；2010：238-258]が、こちらは南海方面の地名に詳しく、萬里石塘・萬里長沙がはっきりと描写されている。上の二地図はこちらの系統である。

明清期には、華夷図式世界図の普及と並行して、中国のみを描いた地図においても重要な発展が見られた。とくに中国の統治範囲を明示した地図の展開に関して、清朝では「康熙図」系の地図の出現と一般化が重要である。康熙年間にイエズス会士の指導のもとに作成され、経緯線が記入されている所謂「康熙図」の系統の諸地図である。先に検討した『大清一統輿図』（1863 年）（東洋文庫蔵）はこの系統に属する。

２　七洲洋問題について下記の論考[嶋尾 2015]を執筆した。その中で本篇の議論を一か所修正した。ベトナム中部沿岸の陸標として史料に現れる「赤坎山」を本篇では、Pulo Cécir de Terre(Hòn Cau) か Pulo Cécir de Mère(đảo Phú Quý)ではないかと推測したが、それを撤回し、ビントゥアン省のファンリ〔Phan Rí〕とファンティエット〔Phan Thiết〕の中間の沿岸の砂丘〔ấp Thiện Ái 附近〕に比定した。

附録

伝統中国を論じる議論のなかに中国の「天下」的性格（文明としての中国）を過度に強調するものがあるように見える。近代的な国民国家の導入以前の中国の自己認識においては、中国とは、華夷秩序にもとづく世界（天命を受けた世界の中心たる天朝とそれを慕って来る蛮夷からなる世界）でしかなかった、この中華世界の範囲は無限定であったとする。確かにそのような世界観が中国人の思考の強力な制約条件の一つではあったのだろう。しかし、限定された統治範囲としての版図ないしは国土の即物的な意識がなかったわけではあるまい。

まず明朝以前のチャイナプロパーに関しては、それは古来、集権的官僚制国家の空間であり、

いかに末端において私的な諸団体の執行が一般的であり、また官僚機構の統治者が腐敗していようが、その限定された統治範囲（省・府・県の集合体）に無自覚な中国人ばかりであったとは思えない。また、中国の各種の歴史地図帳にはチャイナプロパーの国土の「禹貢九州」以来の歴史の深さと大枠の不変性の意識が示されている[海野 2004]。清朝成立以降のマンチュリア、モンゴリア、トルキスタン、チベットに関しても、少なくとも19世紀前半には、無限定に広がる空間ではなく、周辺の「屬國」とは明らかに異る別の制度的枠組（奉天府、理藩院）に包摂され、大清に帰属する限定された被統治空間であるという認識が明確に存在していたのではないか。

版図・国土を明示する中国の地図についてここで見ておきたい。さらに、外部からの認識の例として日本の江戸時代の中国図についても簡単に触れておきたい。

明朝では、このタイプの地図として『大明一統志』(1461年)「大明一統之図」(影印本、三秦出版社、1985 年) が注目される。明国が二直（京師、南京）十三省の集合体であり、周囲を日本、琉球、安南、西蕃、西域、哈密、北狄、兀良哈、女真、朝鮮に囲まれていることが明示されている。省名が黒の四角のなかに白枠・白抜き字で記されているのに対して周辺の国・地域の名は普通に記されており、両者の区別は明白である。和刻本 (1713年) も出版されている（慶應義塾大学三田メディアセンター、Google books、省名は二重線の四角枠の中に記されている。)。

『(嘉慶重修) 大清一統志』(1820)「皇輿全図」(台北：台湾商務印書館、1966年、p.8) を見ると、チャイナプロパーだけでなく、マンチュリア、モンゴリア、トルキスタン、チベットに広がった大清の統治範囲が記されているが、その周囲（陸上）に以下のような記載が見られる（海側には海岸線に沿って「海」の字が８箇所に記されている)。

越南國界
南掌國界
阿瓦界
緬甸界
怒夷界
哲孟雄部落界
廓爾喀界
痕都斯坦界
博洛爾（？）界（字が判読しづらい）
拔達克山界
霍罕界
哈薩克界
俄羅斯界（3箇所）

また、李兆洛『皇朝一統輿地全図』(1841) を主な資料とした『瀛寰志略』(1850年) の「皇清一統輿地全図」も同様であり、周囲（陸上）に次の国名・地形が記されている（沿海には「海」の字が12箇所)。

越南

暹羅
緬甸
怒夷（2 箇所）
布魯克巴（2 箇所）
廓爾喀（2 箇所）
雪山（2 箇所）
布魯特（4 箇所）
哈薩克（3 箇所）
俄羅斯（7 箇所）

なお、『瀛寰志略』も和刻本（1861 年）が出版されている（早稲田大学古典籍総合データベース）。

以上の２例より中国の国土の周囲を海山、他国がとりまいているという認識が確かに存在することが窺える。これらの地図に描かれた中国は華夷図式世界図と違い不定形・無限定の空間ではない。近代的なボーダーラインはもちろん存在しないが、まわりを他国や海山によって囲まれた面的な国土の表象である。このタイプの地図に南シナ海方面が描かれることは無い。

日本の江戸時代の中国図は、中国の地図の影響を受けながら独自の展開を見せたようである。

「広輿図」系の中国図として西川如見『増補華夷通商考』（1708 年）巻 1「中華十五省之略図」が注目に値する。実に簡単な記述で地図学的評価は低いのであるが、特徴的な表現がなされている。各省の範囲を線で区切り、面としての地方単位の集合体としての明国の国土のイメージが明示されている。この図に各省の簡単な紹介を添えた菊岡沾凉『藻塩袋』（1743 年）所載中華略図がある[海野一隆 2005a：355-357]。

「康熙図」系の中国図の代表が、長久保赤水『大清広輿図』（1785）である。大型で詳細な一枚物のチャイナプロパーの地図である。続く岡田玉山『唐土名勝図会』（1806）所載「唐土皇輿全図」も同様であるが、チャイナプロパーの周囲に「安南国界」「西蔵国界」「西域地界」「哈密界」「扎薩克界」「蒙古界」などと記されている。この図は、その後の出版物にしばしば利用されている[海野 2005a：363-372]。

長久保赤水は、『大清広輿図』を基底図として、『唐土歴代州郡沿革地図』（1790）と呼ばれる中国歴史地図帳を作成している。チャイナプロパーの国土の「禹貢」以来の歴史の深さと不変性が日本でも認識されている。この地図帳は、1829 年、1835 年に再版されている。そのほか模倣版も作られ、各種地図に利用されており、明治期にいたるまでかなり広範な影響力を持った。[海野 2005b]。この地図帳の中で注目されるのは、最後の「亜細亜小東洋図」である[講談社 1975：図版二〇]。この図では、日本国、朝鮮、大明国、安南が色分けされ面的に描かれている。四つの国に対して等しく面的な国土としての認識がなされている。ここでは違いは大きさだけである。「朝鮮・明國・安南三国大小分量考定」が記され、国土の大小の簡単な比較が試みられている。

海野一隆. 2004. 「漢民族社会における歴史地図の変遷」『東洋地理学史研究　大陸篇』大阪：清

文堂.
海野一隆. 2005a.「江戸時代刊行のアジア諸地域図」『東洋地理学史研究　日本篇』大阪 : 清文堂.
海野一隆. 2005b.　「長久保赤水のシナ図およびその反響」『東洋地理学史研究　日本篇』大阪 : 清文堂.
海野一隆. 2010. 『地図文化史上の広輿図』東京 : 東洋文庫.
講談社. 1975. 『日本古地図大成　世界図篇』東京 : 講談社.
嶋尾稔. 2015. 「七洲洋に関する覚書」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』46.